様式３

２０１４年度学院留学　研究成果概要

種　　別：グローバル教育力向上に関わる留学（短期・学院留学予算分）
所属・職・氏名：国際学部・准教授・長友　淳
研　究　課　題：①オーストラリアの日本人コミュニティにおける社会的ネットワーク研究
②双方向型講義スキル向上および情報機器の講義への使用実例の考察
留　学　期　間：２０１４年３月２日～２０１４年９月１２日
留　　学　　先：　オーストラリア・シドニー
西シドニー大学（University of Western Sydney）

研究成果概要

本留学は、「グローバル人材育成推進事業」採択に伴う「グローバル教育力向上に関わる教育留学」であり、研究面と教育面の二つの目的があった。第一に、研究面では「オーストラリアの日本人コミュニティにおける社会的ネットワークの研究」と題し、申請者が2005年から2009年に行ったフィールドワークの継続的調査を行った。第二に、教育面では「双方向型講義スキル向上および情報機器の講義への使用実例の考察」を目的として、現地の大学における授業参観や教育実践についての教員間の意見交換を行った。これらの２つの点に関する留学成果は以下の通りである。

①研究面：オーストラリアの日本人コミュニティにおける社会的ネットワークの研究

本留学における研究は、文献・統計調査および参与観察・インタビュー調査からなる質的社会調査を行った。調査は、オーストラリアの日本人居住者の人口が集中するシドニーとクイーンズランド州南東部（ブリスベン・ゴールドコースト）の 2 カ所にて実施し、司書の協力のもと公文書館に所蔵されている 100 年以上前の日本人居住者の写真データから現代のオーストラリアの日本人に関する統計データを収集した。これらの文献・統計調査と並行して、各種同窓会や日本人組織において参与観察を実施するとともに、50 人以上へのインフォーマル・インタビューを経て、フォーマルなインタビュー調査を 15 人に対して行った。

これらの調査を通した中心的な論点は、「エスニック・コミュニティ」概念の再検討であった。従来の移民は、経済的・文化的要素から相互依存的にコミュニティを形成し、日本人会などのいわゆる「エスニック組織」は、コミュニティの心理的中心として機能していた。しかし、今日のオーストラリアの日本人社会においては、エスニック組織は求心力を失いつつあり、現地の日本人居住者はこれらの組織からは距離を置く傾向にある。このように一見「コミュニティ」が衰退しつつある中で、メンバーシップを規定しない自主参加型のネットワークがリゾーム型に広がっている様相が、今回のフィールドワークでは明らかになり、研究を通してグローバル化時代の中間層の移住者のエスニック・コミュニティの一つの社会学的モデルを構築することができた。

これらの研究の成果は、著書、論文および講演に含まれる。それぞれの概要は以下のとおりである。

著書①：単著　*Migration as Transnational Leisure: The Japanese Lifestyle Migrants in Australia* は、これまで行ってきたオーストラリアでのフィールドワークをもとに執筆した英

字の単著である。今回の留学中に原稿の修正作業を行い、現在最終段階の校正を行っている。2014 年度末から 2015 年度前半に Brill より出版予定である。

著書②：編著『オーストラリアの日本人―過去そして現在』（仮題）は、留学中に意見交換を行った当該分野の日豪の研究者約 10 人の執筆協力を得ながら執筆し、2015 年度前半には法律文化社より出版される見通しである。

論文①:「ライフスタイル移住の概念と先行研究の動向―移住研究における理論的動向および日本人移民研究の文脈を通して ―」は、グローバル化時代の中間層の移住に関する理論的動向を整理した論文であり、2014 年末に『国際学研究』に投稿予定である。

論文②：「個人化・情報化・トランスナショナリズム時代のエスニック・コミュニティ再考―シドニー・ノースショア地域における日本人コミュニティの考察を通して―」は、今回の留学期間中に行ったフィールドワーク･データの社会学的考察である。今後原稿の修正作業を行い、学術雑誌『文化人類学』に投稿予定である。

論文③ *“Ethnic Community” Reconsidered in the Era of Individualization, Information Society, and Transnationalism: The case of Japanese Sojourners in Sydney, Australia* は、上記論文②に加筆・編集を加えた上で英訳したものである。今後修正作業を行い、学術雑誌 *Asian and Pacific Migration Journal* に投稿予定である。

また、現地での講演に２件招かれ、2014 年 8 月 22 日にはメルボルンのモナッシュ大学アジア研究所にて、8 月 28 日には西シドニー大学文化社会研究所にて、上記論文①，②，③の内容を中心に講演を行った。これらの講演、論文・著書執筆を行う中で、当該分野の研究者との交流を進め、モナッシュ大学のズラトコ・スカービス副学長、岩渕功一教授、クイーンズランド大学の永田由利子教授と最新の動向をめぐる意見交換を行い、今後のシンポジウム開催や共著出版の企画についても議論を深めることができた。

②教育面：双方向型講義スキル向上および情報機器の講義への使用実例の考察

双方向型の講義は、日本の教育現場で改善を求められている要素であり、今回の留学では現地の講義の参観や教員との交流を通して具体的なアドバイスを得た。今回の留学先の西シドニー大学は、郊外型キャンパスである点や、複数のキャンパスに分散している点から、図書館の電子図書の普及率は高く、講義内でも予習文献の配布や、チュータリング（大講義に付属している少人数ゼミクラス）での題材提供、あるいは教員と学生のコミュニケーションの手段としてブラックボードシステムが普及していた。本学の LUNA に類似しているものの、その活用の仕方として、単に教材配布という手段ではなく、講義内でそのコンテンツに対するフォローを行う事の重要性を多くの現地教員が指摘していた。

今回の留学においては、大人数での講義において双方向性をいかに生み出すかという点を教育スキルの課題として設定していたが、質問の振り方、学生のコメントに対する（建設的な）意見の付け方など、講義を進行する上で細かいながらも非常に重要な技術を観察する機会を得た。また、これまで本学での講義では予習課題として教科書レベルのリーディングマテリアルを使用していたが、いわゆる「原典離れ」の傾向が強い今日の学生には、より専門性・難易度を高めた予習課題の方が結果的に学生の深い学びにつながる点を現地教員が指摘していた。欧米での学生の特質やクラスの雰囲気に相違はあるものの、これらの点は帰国後の自身の講義に活かしていきたいと考えている。

以上